

わい性台利用によるウンシュウミカン‘白川’の生産安定向上技術

北園邦弥・宮田良二¹⁾・満田 実¹⁾・坂本 等²⁾
 (熊本県農政部・¹⁾熊本農業研究センター果樹研究所・²⁾芦北農業改良普及センター)

Kuniya KITAZONO, Ryouji MIYATA, Minoru MITSUTA and Hitoshi SAKAMOTO :
 Stabilization of the Production of Satsuma Mandarin ‘Sirakawa’
 on Grafted Dwarf Rootstock

熊本県育成のウンシュウミカン‘白川’は珠心胚実生由来の品種であるため、果実品質は良好であるが、通常の栽培管理では樹勢が強く、樹冠が大きくなりやすい。そこで、わい性台木であるヒリュウを利用して、樹形のコンパクト化による省力化と果実品質を向上させることを目的に調査検討を行った。

1. 材料および方法

熊本市河内町に植栽されたヒリュウ台‘白川’とカラタチ台‘白川’を供試した。調査は、収量、樹冠容積、主幹周、春枝長、葉面積、葉の厚さ、果実の着色、浮皮、果実内容について行った。

2. 結果および考察

1) ヒリュウ台を利用することにより、カラタチ台に比べて春枝長は短くなり、樹がコンパクトになる(第1表)。葉面積や葉の厚さはほとんど変わらない(データ略)。

2) 1樹当たりの収量はカラタチ台に比べると少ないが、単位容積当たりの収量が多い(第1表)。

3) 樹がコンパクトになることから収穫作業能率が向上する(第1表)。

4) 屈折計示度、可溶性固形物はやや高く、クエン酸含量は変わらない(第2表)。

5) 着色がやや早く(データ略)、果皮色もやや良好になる(第2表)。

6) 浮き皮については差はなく、階級割合は、ヒリュウ台でややM級の割合が高く、2L以上の大玉果が少なかった(データ略)。

以上のことから、ヒリュウ台を利用することで‘白川’の新梢伸長が抑制されて樹がコンパクトになるとともに、果実品質がやや向上すると考えられる。

第1表 台木の違いが‘白川’の樹の生育、収量に及ぼす影響

樹令 (年次)	台 木	幹周 (cm)	樹の大きさ		春枝長 (cm)	節間長 (cm)	収量 (kg)	1 果 平均重 (g)	m ³ 当 り収量 (kg)	100果当 り 収穫時間 (分)
			樹高 (m)	樹冠容積 (m ³)						
7年生 (1996)	ヒリュウ	—	1.3	2.3	11.9	1.8	16.0	148	6.9	—
	カラタチ	—	1.4	3.7	19.0	2.0	20.5	153	5.5	—
8年生 (1997)	ヒリュウ	17.1	1.3	2.9	10.4	1.7	22.8	120	8.6	—
	カラタチ	20.6	1.5	3.8	16.8	2.0	31.1	111	7.9	—
9年生 (1998)	ヒリュウ	18.3	1.4	3.3	10.9	1.8	18.2	181	5.5	6.5
	カラタチ	22.3	1.5	4.7	14.1	2.0	21.1	173	4.5	7.0
10年生 (1999)	ヒリュウ	19.0	1.3	3.3	12.8	1.9	28.1	113	9.5	6.5
	カラタチ	23.8	1.6	5.9	18.0	2.2	46.0	114	8.3	7.4

第2表 台木の違いが‘白川’の果実品質に及ぼす影響

樹令	台 木	1 果 平均重 (g)	果 肉 歩 合 (%)	屈折計 示 度	可溶性 固形物	クエン酸 (g/100ml)	甘味比	果皮色 (a 値)
	カラタチ	142.4	73.0	10.5	11.80	0.94	12.76	16.63
8年生	ヒリュウ	128.7	74.0	12.2	13.79	1.08	12.77	25.43
	カラタチ	128.7	73.1	11.7	12.82	1.03	12.43	24.29
9年生	ヒリュウ	169.6	75.3	10.8	12.22	0.94	13.01	19.88
	カラタチ	171.6	75.8	10.6	12.01	0.98	12.41	19.07
10年生	ヒリュウ	122.9	75.0	11.5	12.74	0.94	13.60	21.31
	カラタチ	123.0	74.6	11.3	12.32	0.90	13.70	21.90